

大会雑感

(福岡) 内藤莞爾

今年度大会の運営方式について、何か書い

てほしいとのご注文なのですが、生憎わたしはオルガナイザーの方では落第生として、目他とも認めている人物です。これという批判も建設的な提案も浮びません。ということは、一つには今度の鴨子の大会が、世話役や地元の方々の努力で、あまり旨くいまずきたこともあろうかと思えます。これはけつしてお世辞ではありません。あとから考えてみて、楽しかったと思う会もあります。また充実していたと思う会もあります。でもこの二つが重なることはめつたにありません。今度の会は、そうしためつたなるものだったと感謝しているような次第です。

場所も都合もあつて、いつもあおした大会を持つことは出来ないと思えます。しかし事情さえ許せば、鴨子式の会を持つことには賛成です。共同体の問題は、まつたく知らなかつたので、もつばら聞き役に廻りましたが、いろいろ啓発されました。まつたく知らなかつた、というのはちよつといひすぎなんです。が、実はその昔、メインやヴィノグラドブやシーボームのものなど読んだことがあります。またアメリカのルーラル・コミュニティなどもかじつたことがあります。これらが日本語の「共同体」に当るかどうかは別として、わたしは村や地域社会の研究に、ことさら「共同体」なんて言葉は使わなくてもよからう。こいつは形容詞や修飾語みたいなもので、ちよつと哲学者がいわずもがなのところ、「論理」だ「範疇」だと勿体ぶりたいものだ。こんなにたかをくくつていたのです。今

度の大会はその真を開いてくれたと思つています。

大会参加者の毛色(?)を大きく分けると経済史と社会学の人になると思います。おそらくけんけん、がくがくになるだろうと予期していたのですが、案ずるより願ひはやすし。ひざをつき合せて話してみれば、案外、了解点がある。今までの予先観念は、どうやら疑心暗鬼だつたという印象を強くしました。もちろん雪解けなんてことを期待もしていません。またそうなつては困ります。しかし同じ対象を扱う以上、何か共通点がなくてはならない。戦後、インターディスペンナリ・アプローチとかいう舌をかむような言葉が流行つています。そしてほうほうでその真似ごとをしていようですが、こうしたアプローチも、本当に地に着くためには、鴨子大会のような話し合いの場が必要なのはありますまいか。まあ共同体の問題を共同体的に討議したということになりましょうか。なにしろ酒という水の共同利用がありましたから。これこそ文字通りの水利というものでしょう。ただ水番の管理状態がよろしくなく、水門を閉め忘れ、一部の田は二十二号ほどの冠水状態になりました。